

## 大学生の読書傾向とその意識

平 賀 増 美

はじめに、

かつて、都立の高等学校に奉職していたことがある。その間、高校生の読書の実態について、毎年、全校的な調査を試みてきた。そして、そこから、読書の指導についてのいくつかの手がかりを得ることができた(1)。

本学に席を得て三年目を迎えることになるが、大学生の読書生活、わけでも、高校時代から、どのように発展しているのか、なかなかつかみがない。そこで、今度は大学生の読書の調査をしてみようと思い、とりあえず、図書館学専攻の六つの大学の学生について、特に次の三点について調べてみることにした。

- 一 最近の学生は本を読まないといわれるが、実際はどうであるか。
- 二 読んでいるとすれば、どのような本をどのように読んでいるか。
- 三 読書に何を求めているか。

この調査は、これだけでは、決して十分とはいえないが、これらの問題について、私なりの解答を求めてみたかっ

たからである。また、対象を図書館学受講生にしばったのは、図書館学を専攻するものにとって、資料に精通すること、読書技術や読書能力等が要求されることから、その実態を特に知りたかったからである。

設問は、読書全般についての項目は、毎日新聞社「読書世論調査」を参考とした。これは、一般社会における読書調査を実施するときの一つの手がかりとなると考えたからである。

### 調査方法

。調査校とサンプル数

亜細亜大学（三九名） 日本経済短期大学（八一名） 玉川大学（七〇名） 日本女子大学（七五名） 武蔵野

女子大学（五二名） 立教大学（八六名） 計四〇三名

。学部別サンプル数

法学（一七名） 経済（一九名） 経営（九七名） 教育（六四名） 社会学（五名） 史学（四〇名） 心理

（二名） 児童（四名） 観光・産業関係学（四名） キリスト教（二名） 家政（二三名） 日本文学（六七

名） 英米文学（五七名） 独仏文（三名）

。学年別サンプル数

一年（九〇名） 二年（一〇四名） 三年（九三名） 四年（一一六名）

。調査実施時期その他

昭和四八年六月。所要時間三〇分。回収率一〇〇％。質問紙により回答を求めた。

## 一 大学生の生活と読書

### (一) 大学生が求めているもの

現代の学生は何を求めているであろうか。彼らの生活の中に読書はどのような形で存在しているのであるか。ここでは、学生が求めているものを知る一つの手がかりとして、将来における自由時間の過ごし方をたずねてみた。回答は記述式として、具体的に記入しやすいようにした。その結果、趣味を生かしながら、教養を高めるよう時間を使いたいという回答が最も多かった。そして、その方法としては、第一位は「旅行」で三二%、第二位は「読書」で二六%、第三位は「スポーツ」一四・九%、第四位「芸術関係」（音楽、映画、絵画）十・七%、第五位その他（手芸、つり、茶花道、FM）三・四%である。これで見ると、旅行、読書、スポーツの三領域が学業以外の面で抱えている最大の関心ごとといえる。このうち読書は第二位で、四分の一以上のものが読書に強い関心を寄せているといえる。これを男女に分けてみると、男子は一位が「読書」、二位「スポーツ」、三位「旅行」となり、女子より男子にいつそう読書への関心が現われている。大学生の読書は、のちに述べるように、この調査でみるかぎり、望ましい状態とはいえないが、しかし読書への関心が薄くなったというのではなく、むしろ、多大の期待や関心を寄せているようである。この、期待や関心を寄せている読書は、学生生活の中で、どのように営まれているのであろうか。

### (二) 生活における読書の時間

これは、一日の生活の中で、本、新聞、雑誌等読むことのために、どのくらいの時間を費しているか。また、それはテレビ、ラジオなどと比較してどうかを調べたものである。

まず、本を読む時間の平均は、六二分で、一、二年と、三、四年とに分けてみると一、二年の平均は五四分、三、四年は七〇分となり、専門課程に進むにつれて、読書の時間も多くなっている。また、一日三時間以上というものも全体の一〇%をしめているが、これに対して、全く読まないで過ごしているものが六・二%。しかし、これらの人たちは、全く読書が必要ではないと思っているのではなく、読書の方法や習慣が身につけていないため、読書の時間が生み出せないでいるようにみうけられる。というのは、後の項の読書量の中で、一冊も読まない理由として、「読書が不必要」と回答しているものは皆無だからである。

雑誌の平均は一八分で、学年別では一、二年が一四・九分、三、四年が二〇・二分となる。全体からみて、約半数は三〇分前後を読んでいるが、一方、全く読まないものが三七%と、三分の一以上となる。

新聞の平均は二七分で、一、二年が二三分、三、四年が三二分となり、やはり高学年の方が高い。雑誌と違って、ほとんどのものは毎日、新聞を読んでいるが、全く読まないものも六・九%いる。これはすべて女子学生で、男子には新聞〇分というものはいない。

これによると、本・雑誌・新聞のために一日平均の所要時間は一〇七分となる。高校生では約六〇分となっているので、<sup>(2)</sup>大学生は約五〇%増しということになる。

次に、ラジオ・テレビについての平均視聴時間をみると、ラジオは六五分、テレビは六九分、また視聴〇分は、ラジオ二二%、テレビ二五%で、この両者の間には、特に著しい相違はみられない。しかし、これらを学年別にみる

と、ラジオは一、二年五四・二分、三、四年七五・四分、テレビは一、二年六〇・九分、三、四年七六・七分となっております。いずれも三、四年の方が多くの時間をかけている。

ところで、これらの五つのメディアを、活字メディアと映像メディアとに分けて、学年別の相違をみると活字メディアに対しては一、二年は九二分、三、四年は一二二分となっている。先に述べた通り、高校生は六〇分であるが、大学生になると三〇分増し、九二分となり、そしてさらに専門課程に進むと三〇分増して一二二分となる。また、映像メディアに対しては、一、二年は一一五分、三、四年は一五二分となる。全体では一、二年が一日平均三時間二七分、三、四年は四時間三三分となり、両者には一時間以上の開きがみられる。つまり読むこと、見ること、聞くことなどのメディアに対しても、一、二年の教養課程よりも三、四年の専門課程の方がより積極的であり、かつ、活発であるといえることができる。

(三) 本および雑誌の費用

一か月間の本代および雑誌の費用はどのくらいであろうか。まず、本についてみると、一人平均一、一五六円を要していることになる。最高七、〇〇〇円という高額のものもあるが、逆に〇円というものもあり、この内訳は一、二年が一〇名、三、四年が一名である。雑誌代の平均は一人二九〇円で〇円のもの約三〇％であるが、これは、学年別の相違はみられない。

本代と雑誌代とを合計すると、一、四四六円となり、約一、五〇〇円が一人平均一か月間の書籍代ということになる。一九七二年の新刊圖書の単価は一、四九八円（重版を含めた単価は一、二八〇円）であるので、月平均一冊の割

合で購入することになろうか。なお、定期購読の雑誌のあるものは、過半数の五〇・三％となっている。

ところで、五、〇〇〇円以上を毎月書籍代にあてているものが、約三％いるが、その読書時間をみると、いずれも本を読む時間は二〜三時間以上、新聞・雑誌はそれぞれ三〇分、そして、ラジオ・テレビのための時間は平均より低く、読むことへの関心が他のものより強く現われている。

さて、これら本や雑誌の費用は、学生の小遣の何パーセントぐらいに相当するかをみると、約一〇〜二〇％にあたるというものが六一・二％で全体の半数以上をしめている。このことから小遣を換算すると、約九、五〇〇円ということになるうか。書籍代五、〇〇〇円と回答したものの約九〇％が、その額は小遣の五〇％に相当するといっているところを見ると、この調査に現われた大学生の小遣は約一万円前後ということになる。

## 二 読書に何を期待しているか

今日のマス・メディアの中で、読書はどのような役割を果たすことを期待されているのであろうか。次は、それぞれのメディアの有効性について調べ、読書の位置を明らかにしようとしたものである。つまり、

- ① 内外情勢を知るため
- ② 世論の動向を知るため
- ③ 判断や意見の材料にするため
- ④ 教養を高めるため

⑤ 仕事や勉強に役だてるため

⑥ 日常生活に役だてるため

⑦ 趣味のため

⑧ 話題を豊かにするため

⑨ 娯楽として

の九領域に対して、本・週刊誌・月刊誌・新聞・ラジオ・テレビの六つのメディアのうち、それぞれにどれが最も役だつかをたずねたものである。それによると、教養、趣味、社会生活、日常生活など最も多方面への期待を寄せられているのは、「本」である。次いで新聞、テレビとなる。調査の結果は、次のような三つのグループに分類することができるとができる。

第一は「本」を中心とするグループで、これは「判断や意見の材料にする」三八・二%、「教養を高める」七六・一%、「仕事や勉強のため」六四%、「趣味のため」三二%の四領域において、本の利用が第一位にあげられ、全メディアの三分の一をしめている。なかでも最も多くの期待を寄せられているのは、教養で、「教養を高めるため」には図書によると八割近いものが答えている。なお、このグループでは本に次いで期待されているものは新聞で、趣味を除く他の三領域については、第二位を占める。そして第三位に月刊誌があげられている。つまり、本↓新聞↓月刊誌の順になっている。「趣味」の場合は、第二位は月刊誌であるが、これは第一位の図書三二%に近い数である。したがって、「趣味」のためには、本と月刊誌とがほぼ同率に使われているとみることができよう。趣味の第三位はラジオとなっている。

第二位は新聞を中心とするグループで、これは「内外情勢を知る」六八・二%、「世論の動向を知る」六一・五%、「日常生活に役だてる」二五・五%の三領域に対して、第一位に新聞があげられている。特に「内外情勢」と「世論の動向」をつかむためには、六〇%以上のものが新聞を利用してゐる。このグループで第二位に使われるメディアは、テレビである。特に、「日常生活」のためには、テレビ一八・一%となり、新聞に近い率を示している。第三位は「内外情勢」と「世論の動向」のためにはラジオが、「日常生活」のためには月刊誌があげられている。第三はテレビを中心とするグループで、これは「話題を豊かに」二一・五%、「娯楽」五二・六%の二領域で、これらのために第一位にテレビがあげられている。しかし「話題を豊かに」するための第二位は新聞二〇・三%、第三位は週刊誌一九・一%でいずれも第一位と非常に接近している。一方「娯楽」のためには、第一位のテレビが過半数をしめており、第二位は週刊誌一六・六%、第三位はラジオ一五・三%となっている。

以上、各領域とメディアとの関係をみてきたが、最も利用されているのは「本」であり、次いで新聞、テレビとなる。この三つはそれぞれの領域において、それぞれの主役を果たしている。また、月刊誌、週刊誌、ラジオは補助的な存在であるが、うち、月刊誌は「趣味」の項で第一位に近い数を示しており、他のメディアより利用性が高い。また、活字メディアと映像メディアとでは、活字メディアの方に強い関心と期待とが寄せられているといえる。

### 三 読書生活

#### (一) 読書の量



これは本年五月から六月にかけての一月間に、どのくらいの量の本と雑誌とが読まれたかを調べ、年間の読書量を推定しようとしたものである。

まず、本の一人一か月平均の読書量は、四冊である。これをまた学年別にみると、一、二年は三・九冊、三、四年は四・二冊となり、読書時間と同様に専門課程の方が読書量も多い。これを男女別にみると、男子四・〇八冊、女子四・一一冊で、高校時代は男子より女子の方が読書量が多いが、大学ではほとんどその差は認められない。なお、高校生の一人一か月の平均は三・一冊である。大学生が平均一か月四冊とすると、一年間で四八冊、四年間の学生生活では二〇〇冊近い本が読まれることになる。四冊以上を読んでいるものは、全体の四五・四％であるため、約半数は少なくとも二〇〇冊を読んで卒業となるわけである。

ところで人間は一生の間に一体何冊の本を読むことができるだろうか。これについてアメリカの文学史家バン・ウィック・ブルックス（一八八六～一九六三）は次のように言っている。「ヒットラーは書齋の軍事書七千冊、アラビアのローレンスはオックスフォード図書館にある四万冊の大部分を。私は過去二〇年間に一日平均六～七時間、それでも二〇年間で六千足らず、一日一冊にも足りない」と。学生時代の読書力、月平均四冊を持続出来たとしても、年間五十冊弱では二〇年間で千冊で、ブルックスに及ぶべくもないが、一方には、一か月間一冊も読まなかったものもある。これは四・四％で、読まなかった理由として、「何となく過ごしてしまった」「身近のことや、クラブ活動等で忙しかった」などをあげている。

次に雑誌について、これを月刊誌、週刊誌、マンガ誌に分けてみると、まず月刊誌は平均一・三冊となる。多いものでは五～六冊というものが二％、反対に全く読まないものが三二・五％、全体の約三分の一をしめる。

週刊誌の一月平均は、雑誌よりはやや高く、一・七冊である。全く読まないものも雑誌より多く三七・七％、反対に最高は二五冊というものもある。週刊誌を読む動機は、第一に「ひまつぶし」三〇・一％、第二に「息ぬき」二七・二％、第三に「習慣」一七・七％となっている。また読まないものの理由は、第一に「同じストーリーだから」四七・七％、第二に「ひまがない」一八・四％、第三に「値段が高い」一六・一％となっている。

マンガを中心とした雑誌は、平均一・二冊で、全く読まないものは四一・四％である。月刊誌や週刊誌より平均が低く、また、不読者も多くなっている。しかし最高四五冊というところを見ると、そうとうのマンガファンがいるようである。

読まれている雑誌の内容についてはここでは紙数の関係上ふれることは出来ないが、大きな傾向として、総合的な雑誌が読まれなくなり、反対に、個々の主題ごとの雑誌が読まれる傾向にあるといえる。これは、必要な情報を容易に入手することが出来るからであろう。

## (二) 選択の動機

では、どのような動機でそれらの本を読んだのだろうか。個々の項目で上位にあげられたものは、第一に「友人、先輩のすすめ」、第二「著者が好き」、第三「書店でみかけて」、第四「先生のすすめ」であるが、全体からみると、次の五つに分けてみることができる。

第一は、人間関係によるもので「友人、先輩のすすめ」「先生のすすめ」など人にすすめられて読んだものが三〇％をしめている。

第二は嗜好によるもので「著者や出版者が好き」「書名がおもしろそう」だから読んだものが二五％である。

第三は、書店で「実物をみて」選んだもの一三・八％。

第四は「各種のメディア」によるもので、これは新聞・雑誌の書評や広告・テレビ・映画などを含めて一二・九％である。このうち新聞と雑誌とを比較すると、新聞は六・八％、雑誌は三・四％で新聞の方が多く用いられている。また、書評と広告という観点からみると、書評は五・五％、広告は四・七％で書評によるものの方がわずかではあるが高い。これはある程度内容をたしかめた上で選択するものが多いとみてよい。なお、テレビ・映画等映像メディアの影響は、選択にはほとんど現われず、わずか一％である。

第五は、有名度によるもので、「話題になっているから」「有名だから」など一〇・五％である。

ところで、これを小・中・高校の時代の選択の態度と比較してみると次のようになる。小・中・高とも、第一位は「書名がおもしろそう」であるが、これは小学校では五二％、中学五〇％、高校三一％と高学年になるにつれて率がさがり、大学では八・四％となる。反対に「著者が好き」は、小学校では少数であるが、中学では急上昇し、第二位になり、高校、大学でも同位である。これは中学ごろから次第に自我が確立し、個性的な読書が行なわれるようになるからとみられる。「書店の店頭で実物をみて」選ぶものは、高校から多くなってくる。大学でも同様である。注目されるのは「先生のすすめ」で小・中・高では「動機のベスト五」にははいっていないが、大学では四位にあることである。これは大学になると、専門的な分野の情報は友人のそれでは満足出来ず、より自分を鍛えてくれるものを求める結果であろうか。本を媒体としてみたとき、先生との接触が疎遠であるとはいえないようである。

### (三) 入手経路

それらの本をどのようにして入手したか、その経路をみると、第一は「自分で購入」五一・八％で過半数をしめている。第二は「友人、先輩から借用」一六・二％で、選択の動機で「友人、先輩のすすめ」が多かったように、ここにもその影響が強く、読書習慣が人間関係に深いつながりのあることを示している。第三は「図書館から借用」一五・一％である。うち、一二％が自校の図書館または研究室から、三％が他の図書館となっている。第四は「家にあった」もの一三％、最も少ないのは「先生からの借用」一・七％である。こうみてくると、自分で購入と友人からの借用および図書館の利用がその主な経路といえる。

### 四 読書傾向

#### (一) 読まれた本

一か月間に読まれた本をみると、三対一の割合で日本の作家のものが多く、まず作品の方から概観すると、第一位は「青春の門」（五木寛之）である。これは主人公が大学生であること、わけても親に頼らずに生きてゆく姿への共鳴だろうか。第二位は「華岡青洲の妻」（有吉佐和子）で、これはかつて青少年読書感想文コンクール（毎日新聞社）の課題図書ともなった作品でもあり、また、芝居やテレビ等の影響と考えることができよう。第三位「悲しみよ今日は」（フランソワーズ・サガン）は、若人の感情を描いた純粋文学、外国作品では上位に登場する唯一の作品である。第四、五、六位は石川達三の作品「青春の蹉跌」「幸福の限界」「人間の壁」で、前二者は人生論風のものであ

る点に、また、後者は彼らが受けてきた教育への批判からか。第七位「金閣寺」（三島由紀夫）は、論理では説明できないもののへの共感からであろうか。第八位「ぐうたら愛情学」（遠藤周作）はぐうたらシリーズの一冊として。第九位「されどわれらが日々」（柴田翔）は若人の文学、第十位「恍惚の人」（有吉佐和子）は、テーマが今日的である故に受けているベストセラーズといえようか。

次に作家の面から考察すると、次のようになる。第一位は遠藤周作で、作品の主なものは「ぐうたら……」といういわゆるぐうたら人間を描いたものである。これは、かつてのまじめ人間にかわって登場したもので、まじめな意欲を持ち乍らも実行が伴わず、意欲を喪失した人間、または情報氾濫時代故に、情報におし流され、自分を失いがちな人間、こうした人間がもはやどうにでもなれと胡座をかいた姿——いわゆるぐうたら人間である。若人たちはこのぐうたら人間の中に自分を見出し、また安心もする。つまり、作品を通して敬虔なクリスチャンとしてのまじめ人間、遠藤周作の中にぐうたら人間を読みとり、著者と同一の世界に住むという仲間意識が彼らを著者に近づけてゆくのであろう。そして、ぐうたら人間時代こそ若人の新しいユートピアであるかのような錯覚に導かれてゆくのである。一度仲間意識で結ばれた若人たちは、ぐうたら人間以外の作品にも、彼の作品をよく読むことになる。そしてここにあげられた作品だけでも、二八タイトルを数えるほどである。

第二位は石川達三であるが、第一位の遠藤周作とは一点の差のみである。その魅力は何といってもテーマにあり、テーマが直截的に伝わるという点にあらうか。彼の作品は登場人物をあげ、彼らをじっくり心理分析してゆき乍ら、悩み、泣き、笑う。読者はそれに自分の悩みをぶっつけ乍ら読みすすみ、読みすすみ乍らまた自分の悩みが作品におきかえられてゆく。だからどちらかというと、彼の作品の場合は、長く読者を保持するというよりは、若人にとって

途中下車であり、悩みを持った人間が一度は途中下車するところといえよう。もう一つは、ほとんどの作品が文庫で入手することができることから、求めやすさという条件も影響していると思われる。

第三位は五木寛之である。彼の文体は「音楽」であるといわれるほど、若人のフィーリングである。さらに、現代の問題を提起して、ナンセンス意識をうまくうけとめているところも若人をひきつける秘訣であろう。特に、「五木を読まざるは若人にあらず」式のムードを作り上げた出版者側の影響もあってか、「わたしもあなたも」と一時期熱狂的なファンを得たがその後過渡期を迎えながらも、今、再び五木を見直そうという風潮があるようである。これからも、なお、ついに行く読者が実は真の五木ファンといわれるのだが、もう一つ五木が受けた理由として、イメージ統一があげられる。つまり、本の装幀などにしても、著者のこのみにより個性を生かした点にあらう。とにかく、自ら朗読したレコード（エッセイ集）もあるほど個性的な作家ではある。

第四位は三島由紀夫、第五位夏目漱石、第六位有吉佐和子、第七位フランソワーズ・サガン、第八位松本清張、第九位山本周五郎、第十位井上靖である。三島は反体制的な要素にひかれて、有吉はベストセラーズの影響、松本は社会派のスリラー作家として幅広い読者を持ち、山本は人間的なふれ合いを求める人に、井上はテーマが理解しやすく、そして夏目漱石は、国民文学として、時代を超えて親しまれている。

ところで、以上みてきたように、読まれた作品は、上位にあげられているものは、ほとんどが現代の作家のものである。この点、高校生とは多少異なっている（8）。つまり、高校生では作品の最上位は「どくとるまんぼうシリーズ」であるが、二位以下は「武器よさらば」「こころ」「友情」「雪国」「人間失格」「車輪の下」などで、著者では「北杜夫」「夏目漱石」「石坂洋次郎」「川端康成」「ヘミングウェイ」「ヘッセ」「武者小路実篤」等が挙げられ、

全体的にみて、どちらかというと名作に集中しているといえる。

(一) 感銘を受けた本

読まれた本が現代作家に集中しているのに対して、今までに読んだ本の中で特に感銘を受けた本となると、それは古典的なものに集中し、ましてまたここには外国文学も多数登場する。

まず、感銘をうけた本の第一位は「こころ」であり、これは高校生でも同じである<sup>(9)</sup>。漱石はすでに述べたように、各層の支持を得ており、「読書世論調査」<sup>(10)</sup>でも、昭和二四年から同四六年までの好きな著者ベスト一にあげられている。第二位は「風と共に去りぬ」、第三位「大地」である。第四位以下は「赤毛のアンシリーズ」「出家とその弟子」「沈黙」「泥にまみれて」「罪と罰」「女の一生」(モーパッサン)「人間失格」の順となっている。いずれも内外の名作であることが注目される。これらは高校時代に最も多く読まれている作品であり、その感動が今なお続いていること、そして、その後の読書においては、それに匹敵する作品への邂逅が得られなかったものと思われる。

(二) ベストセラーへの反応

大学生がベストセラーにどのような反応を示しているか。これは過去七年間のベストセラーを上げ、読、不読をたずねたものである。その結果、約三分の一はベストセラーに関心を寄せているということがいえる。

第一位は、四二年のベストセラー「頭の体操」(多湖輝)で、これは半数以上の五三％が読んでいる。第二位は四六年の「日本人とユダヤ人」(イザヤ・ベンダサン)で四八％、第三位は四一年の「氷点」(三浦綾子)四七・八％、

第四位は四七年の「恍惚の人」四〇％、以下「どくとるまんぼう青春記」三三％、「冠婚葬祭入門」二二・八％、「天と地と」一八％となっている。「頭の体操」はベストセラー中のベストセラーであり、「冠婚葬祭入門」などは、直接その必要を感じない年代のためか、余り読まれず、いずれも大学生らしい結果といえる。

なお、かつての学生によく読まれたといわれる作品、たとえば、「古寺巡礼」「古寺巡礼」「三太郎の日記」「善の研究」などが、現代どう受けとめられているかをみると、「古寺巡礼」は一〇・八％、「三太郎の日記」七・六％、「善の研究」六・六％のものが読んでいるに過ぎず、その関心度は非常に低い。つまり、かつての人たちが読んだこれらの本を、今の学生が読んでいないところから、今の学生は本を読まないといわれる結果になったとも考えられる。

#### おわりに

以上、大学生の読書の実態について私見を述べてきた。すなわち、第一に、一部の学生を除いては、予想したほどには読書をしているとは考えられない。その理由として、一つには、書物が多すぎて選択に迷うことが挙げられる。次に、映像メディアの普及により、それらから容易に情報を入手することが可能であるからであろう。これは、現代の社会では如何んともしがたいことではあろうが、前者については、指導の方法によっては、うまくいくのではなからうかと思う。こういうことは、やはり、高校生の読書調査においてもいえることであった。したがって、中学・高校とこの間密接な連関を保ちながら、計画的な指導を施してあるならば、大学生になって少なくとも、専門外の教養としての読書についての指導は、必要がなくなると思うのである。しかしながら、現状では、前者の指導にまつより仕方あるまい。アメリカにおいては、一九五〇年ごろから学生の読書に関する全国会議が毎年開催され、その研究が



続けられているという<sup>(1)</sup>。読書指導といえ、わが国の場合、とかく学校教育に向けられる問題であるが、大学進学率の高まってきた現今では、大学生の読書の問題についての研究や対策が必要と思われる。

第二に、読書と読書観の分離という現象がみられることがあげられる。つまり、メディアの利用法でもみた通り、読書に多大な関心を持ちながら、そして、それに多大な期待をかけながらも、あえてそれを現実にはしようとしない。それは、単に読書観となるのみであって、実際の読書行為とはなっていないようである。

第三に、読まれている作品の大半は、現代作家のものであり、古典をひもどいて昔にかえるより、ごく手近なものを手にしている傾向が強いことである。現代のものは、テレビなどからも摂取することができるので、極言すれば、むしろ古典的なものをこそ読書に求めねばならないかも知れないのであるが。この点、高校生の読書の方が幅広く、そして深いものがあつたかにみえる。一般に、社会に出てしまうと余り本を読まなくなるともいわれるが、これは、大学時代の読書の方法に何らかの問題があると考えられはしないだろうか。

はじめにも述べた通り、これらがすべての学生にただちにあてはまるとは思われない。しかし、被調査者に、各学部、学科の学生が含まれていること、そしてまた、各学校間の相違も特に顕著には現われていないところを見ると、これを現代の学生の読書の実態として、調査方法にいくらかの問題があるとしても、これからの大学生の読書の指導についての、多少の参考になるかと思うのである。

(昭和四十八年八月二十三日脱稿)

注

(一) 高校生の読書傾向とその意識「読書科学」一九七三年六月 十七卷 第一号 一〇八頁

(二) 前掲論文

- (三) 「出版年鑑」 一九七三年版 出版ニュース社
  - (四) 「読書世論調査」 一九七二年版 毎日新聞社
  - (五) 「読書科学」 前掲論文
  - (六) 「朝日新聞」 一九六二年三月五日
  - (七) 「読書世論調査」 前掲書
  - (八) 「読書科学」 前掲論文
  - (九) 前掲論文
  - (十) 「読書世論調査」 前掲書
  - (十一) 阪本敬彦 大学生と読みの教育——アメリカの大学の読書の話題——「厚生補導」 一九七一年九月 六四号
- 筆者は本学講師・図書館学